

## 事業報告書

(※必要に応じて枠を広げてご記入ください。)

1 事業名	精神障害当事者とともに築く福祉教育プロジェクト
2 事業期間	2025年 6月 ～ 2026年 2月
3 事業内容	<p>具体的な内容（いつどこで何を実施したか等）</p> <p>那覇市立真和志中学校1年生（3クラス・計81名）を対象に、全3日間・各2コマ（110分）の福祉教育授業を実施した（内容は以下の3本柱）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・精神障害当事者によるリカバリーストーリー（体験談）の語り</li> <li>・当事者の経験を再現・可視化する演劇ワークショップ</li> <li>・小グループ対話および振り返りアンケートの実施</li> </ul> <p>・6月4日 真和志中学校にて、1学年生徒（3クラス108名）を対象とした「キャリア教育（総合学習）」へ「障害福祉」の講話を行う。</p> <p>・7月3日 劇団所属俳優および精神障害当事者と「演劇授業」の打ち合わせ</p> <p>・7月14日 真和志中学校にて 校長先生、繁多川公民館スタッフと「演劇授業」について説明</p> <p>・7月23日 首里中学校にて教頭先生と打ち合わせ ← 今年度開催は厳しいとのこと（次年度に向けて）真和志高校 教頭先生へプロジェクト概要資料を渡す。</p> <p>・8月22日 真和志小学校 教頭先生へプロジェクト概要資料を渡す。</p> <p>・9月17日 真和志中学校1学年生徒10名が、NPO法人あごらびあ「就労支援事業所あ・ん」へ来所交流。</p> <p>・9月25日 劇団所属俳優および精神障害当事者と「演劇授業」の打ち合わせ（あごら）</p> <p>・10月4日 劇団所属俳優および精神障害当事者と「演劇授業」の稽古（あごら）</p> <p>・11月27日 真和志中学校にて1年1組の生徒・担任と演劇ワーク（劇団俳優2名 精神障害当事者5名）</p> <p>・12月5日 真和志中学校にて1年2組の生徒・担任と演劇ワーク（劇団俳優2名 精神障害当事者5名）</p> <p>・12月11日 真和志中学校にて1年1組の生徒・担任と演劇ワーク（劇団俳優2名 精神障害当事者4名）</p> <p>・2月20日 真和志中学校1学年総合学習担当教員、劇団俳優2名、精神障害当事者4名で、事業報告書を確認の上振り返り</p>

	達成目標（事業計画書と連携させる）	目標数値	実績値	達成度（%）
4 達成目標と達成度	・事業参画人数	・200名	・85名	・42.5%
	・振り返りシート回収率	・90%	・100%	・111%
	・事後アンケートにて「精神障害者への理解が深まった」と回答した割合	・70%	・98.8%	・141%
	・当事者が語る機会を通じて自己肯定感の向上を実感したと回答した割合	・50%以上	・88.9%	・178%
	<p>結果に至る理由、気づき、検証等</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・当事者が「支援される存在」ではなく「学びを共に創る存在」として前面に立ったことが、生徒の主体的な受け止めを促した。</li> <li>・演劇ワークにより、抽象的な精神症状が具体的な体験として理解された。</li> <li>・アイスブレイクやユーモアを交えた進行により心理的安全性が確保された。</li> <li>・一方向的講義ではなく、対話・体験・振り返りを組み合わせた構造が深い内省を促進した。</li> </ul>			
5 事業の成果	<p>事業を実施したことで得られた結果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・対象者に及ぼした影響 <ul style="list-style-type: none"> <li>※精神障害に対する偏見が軽減し、「差別せずふつうに接したい」という人権意識が高まった。</li> <li>※「今の自分でいい」と感じる生徒が増加し、自己肯定感の向上が見られた。</li> <li>※困っている友人へ声をかけられそうと回答した生徒が9割前後に達した。</li> <li>※相談の心理的ハードルが下がるなど、援助希求行動の促進が確認された。</li> </ul> </li> <li>・連携機関、協力者に及ぼした影響 <ul style="list-style-type: none"> <li>※担任教諭全員が「とても満足」と回答し、教育効果を高く評価。</li> <li>※演劇的手法の有効性が共有され、今後の授業実践への波及意欲が示された。</li> <li>※学校側から「外部専門家の定期的関与」「校内相談体制の充実」など具体的支援ニーズが明確化された。</li> </ul> </li> <li>・地域、コミュニティに及ぼした影響 <ul style="list-style-type: none"> <li>※精神障害当事者が「語り手・担い手」として社会参加するモデルを提示した。</li> <li>※当事者自身の自己効力感が向上し、社会参加意欲が高まった。</li> <li>※教育現場を核とした「地域共生教育」の可能性が実証された。</li> </ul> </li> </ul>			

<p>6次年度以降の展開</p>	<p>(ビジョンを見据えたくらで次年度以降に予定している展開)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・真和志中学校でのモデルを市内他校へ展開する。</li> <li>・単発実施ではなく、年間プログラム化を目指す。</li> <li>・タブレットを活用したアンケート実施等、ICT活用による運営改善を行う。</li> <li>・ピアサポーターが学校内で継続的に関われる仕組みを検討する。</li> <li>・保護者向け啓発・教職員研修との連動を強化する。</li> </ul>														
<p>7 実施した事業全体への自己評価とその理由</p>	<p>①自己評価(5段階評価) 当てはまるところに○をつけてください。</p> <table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <tr> <td></td> <td>と て も 良 か っ た</td> <td>良 か っ た</td> <td>ま あ ま あ 良 か っ た</td> <td>少 し 良 か っ た</td> <td>全 く 良 く な か っ た</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>5</td> <td>4</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> <td></td> </tr> </table> <p>1 課題設定は良かったか <input checked="" type="radio"/></p> <p>2 解決策として良い手法だったか <input checked="" type="radio"/></p> <p>3 自団体の実施体制は良かったか <input type="radio"/></p> <p>4 他団体との協働体制は良かったか <input type="radio"/></p> <p>5 対象者への周知は良かったか <input type="radio"/></p> <p>②上記の結果となった理由について 別紙参照</p>		と て も 良 か っ た	良 か っ た	ま あ ま あ 良 か っ た	少 し 良 か っ た	全 く 良 く な か っ た			5	4	3	2	1	
	と て も 良 か っ た	良 か っ た	ま あ ま あ 良 か っ た	少 し 良 か っ た	全 く 良 く な か っ た										
	5	4	3	2	1										
<p>8 市への要望・欲しい支援等</p>	<p>なは市民活動支援事業に係る下記の項目に対して (①事業説明会 ②個別相談 ③募集期間 ④広報支援 ⑤オープンデータ 等)</p>														

## 自己評価について（5段階）

### 1、設定は良かったか（5）

本事業は、若年層の精神障害理解の促進と自己肯定感の向上という明確な社会課題に基づき設定された。対象を中学1年生としたことは、思春期初期という心身の変化が大きい時期に「心の健康」や「SOSの出し方」を学ぶ機会を提供するという点で極めて妥当であった。

### 2、解決策として良い手法だったか（5）

当事者の語りと演劇ワークを組み合わせた体験型プログラムは、単なる知識伝達型授業よりも深い共感的理解を促した。特に以下の点で効果が顕著であった。

- ・演劇により「見えない心の苦しさ」が可視化された
- ・当事者の実体験が抽象論ではないリアリティを生んだ
- ・安心感を生む進行により心理的安全性が確保された

### 3、自団体の実施体制は良かったか（3）

事前準備、学校との打ち合わせ、役割分担、当日の運営進行は概ね円滑であった。特に、当事者への事前フォローと心理的配慮を行いながら実施できた点は重要な成果である。一方で、振り返りアンケートの紙運用や集計作業に時間を要したことから、次年度はICT活用による効率化が望まれる。

### 4、他団体との協働体制は良かったか（4）

学校側との連携は円滑であり、事前調整から当日の協力体制までスムーズに機能した。担任教諭からは次年度継続希望が示されており、信頼関係の構築ができたと考える。また、精神障害当事者との協働においても、「支援される側」ではなく「共に創る側」として対等な関係性を築けた点は本事業の本質的成果である。

### 5、対象者への周知は良かったか（4）

学校を通じた対象者への案内は適切に行われ、出席率・回収率ともに高水準であった。授業参加に対する拒否反応もほぼ見られず、心理的安全性も確保されていた。ただし、保護者への事前周知や地域への広報という点では、今後さらに強化の余地がある。次年度は保護者向け資料や説明機会を設けることで、より包括的な理解促進を図りたい。